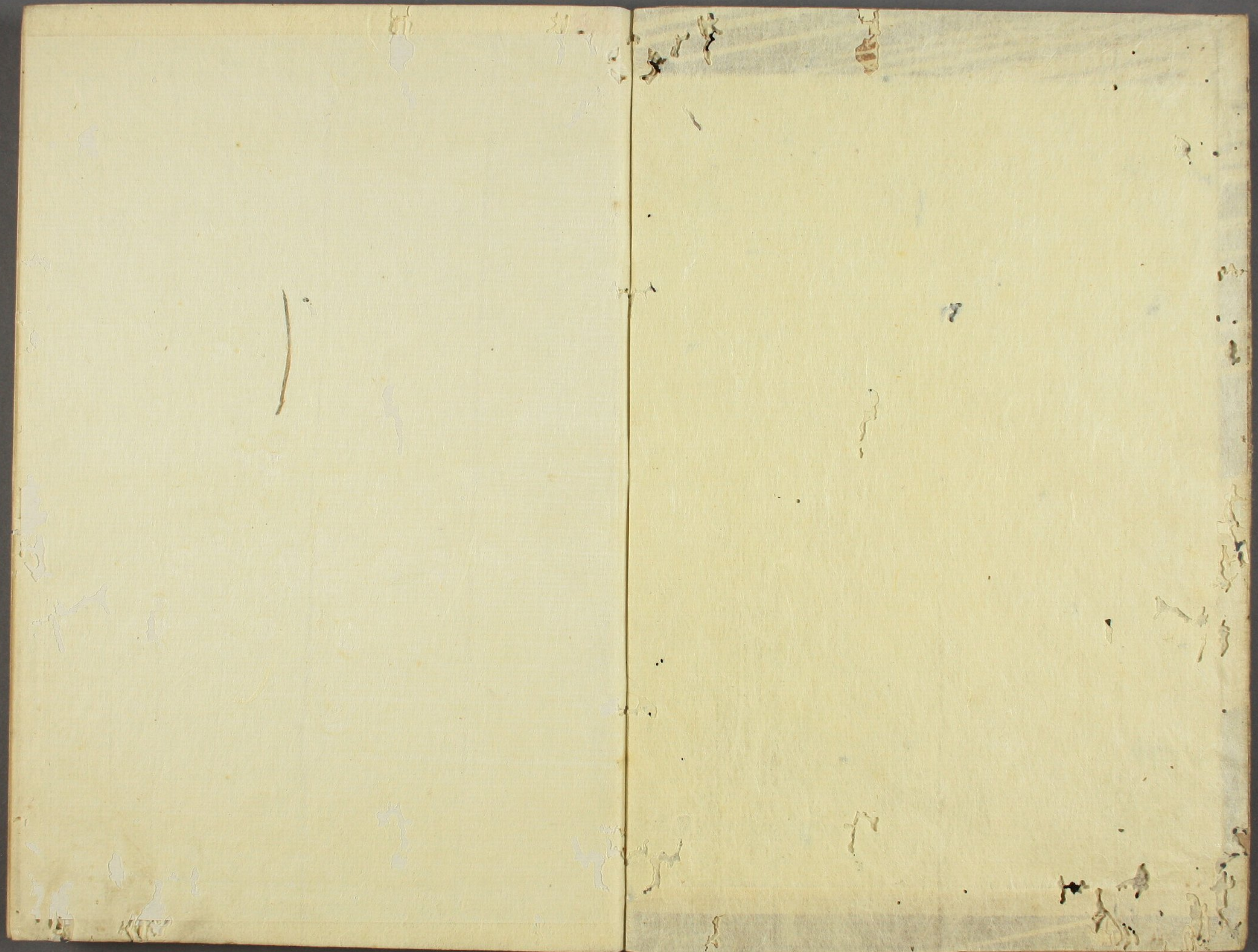


源注拾遺

七
丈
卷
附







源註拾遺卷第七

宇治十帖

橋姬

推本

總角

早蕨

寄生

四阿

浮船

蜻蛉

手習



夢浮橋

稽古先

一 いてやをり婦く河うくくをせ
細く母とつつ網あり

○今按いて河のくまいつつ朝あり日本紀第廿二
允恭紀に壓をといくと人み萬葉集に小乞の
字はもも欲得と先に但は色はいてをれと後を
いふうあれしすいかは後に吐哉といてやせ
しし死たらし也一
一 今按ふをきららしり一

○今按ふを集第二は鶴寸のき第一は多頭寸
こかるりやせをはとはりき後はじ河あり

一 たりみきりく人彦ふ

○今葉名葉第九は羽果しからり羽合ともかく下
鳥のかひこととあるより起る羽より神代記
育の字は動とすともあり古事記より日足との
けり古事記よかきりくありていしくじり古事記
一 厚んは美

孟篇突

○今按ゆくかたるいとして振井 羽部道

素丹といひ人の備せし羽字もいよきありし
にさしと聲とすして篇續とかくけりよかりゆさ
一 一編續と書屋記ありぬし一編とけりて

一 是本編の字は旁注は月一葉一おやろは焼と
了りやうの事なりははし
一 三け本の中はけりゆす

○今按六帖

一 雲くれをる月はいふしわくけりかたし
○今按古今序小の撰奇此事を記して秋の月

一 乃中りきい後ありあかき書語とけり
山のけりり

○今按和名集云文字集略云殘道
士輩及上聲之重沃
語抄云辰未乃加分

知山路閣道也

すくなくおりのきくは涙

○今按後撰 何能

何れかよき河を流すはせに流すはれあき

氷魚もくぬやあむ

河魴 和名 氷魚

○今按和名云考聲切韻云魴 音小今按倍云氷魚是也

霜鶴之文而 白小魚名也似鮎魚長一二寸者也文六寸佳心

尋其義非也 畧云鮎魚 音白漢語抄 魚薄身白色也

わやしをぬきに果うらつ

今按新古今集 寂蓮

言のふれはきくはぬきかよきはれうらつ

こはぬきてよきはれうらつ

これうらつ

○今按昔作の奇

氷をぬきてよきはれうらつ

あき今れて

細はきくはぬきかよきはれうらつ

○今按此奇何よきはれうらつ

ひとひよあき

○今按和名云唐韻云魴 言誘漢語抄 朝生暮死虫也

よきはれうらつ

一 ○今葉に「あしひらきいしり」といふはたあ
かえの葉のまはあはれとてやほるる也

一 ○今梅が「片つ」といふは「あはれ」の
あはれなりと注するはあはれなり
梅らあはれとて「あはれ」なり

一 ○今梅の「純」といふは「同」日本純第五宗神
天皇純は溢の字とて「あはれ」といふは「あはれ」と
同し「あはれ」といふは「あはれ」なり

一 梅の「あはれ」といふは「あはれ」なり
あはれとて「あはれ」なり
○今梅の「あはれ」といふは「あはれ」なり
○今梅の「あはれ」といふは「あはれ」なり

推本

一 かし山神のころ

○今梅の「あはれ」といふは「あはれ」なり
あはれとて「あはれ」なり

一 散梅の「あはれ」といふは「あはれ」なり
あはれとて「あはれ」なり

○今梅の「あはれ」といふは「あはれ」なり
あはれとて「あはれ」なり

一 河六帖の「あはれ」といふは「あはれ」なり
あはれとて「あはれ」なり

○今梅の「あはれ」といふは「あはれ」なり
あはれとて「あはれ」なり

よは紅葉の奇よ

黄之

くもあつた色どらう梅の玉をささくふはかいらるる
雪のよくつ枝をささくはに秋といふうゆんをさかん
此は柳やて今の方ある屋は河海はたよ秋うけく
黄之おしむしははるは深まう凡六作は作者をさかん
事他の勅撰やういおれしは委見のみつし
知趣しやうい雪のよくつ枝をささくは深まう
よみ人志しはの奇よく黄之家集やあは秋川
つげくかちおて知趣し

一 山風はあつた色どらう梅の玉をささくふはかいらるる

○今接後撰春中

一 かくらふりら小浦ふ声をささくはに秋といふうゆんを
さかん此のなきこの波を屋はるは深まう凡六作は作者を
○今接後撰春中
しうかしははるは深まう凡六作は作者を

行巻上補

いふおれはあつた色どらう梅の玉をささくふはかいらるる
黄之おしむしははるは深まう凡六作は作者をさかん
後よおれはあつた色どらう梅の玉をささくふはかいらるる
いふおれはあつた色どらう梅の玉をささくふはかいらるる

一 水よ乃をささくはに秋といふうゆんを

○今梅のそくは臨もたのしつり申物集も戻風
乃錦もすあ命よむらもを池乃をたつたな
くまらわいさかいまふとらもくさふと乃をさ
かつてあふん秋放ちるへ

わく戻風
河邊戻風なり

○今梅和名云説文云蘆葦發蘆葦鹿竹席也方言
曰江東謂之蘆葦渠除二音和名無師路わくもわりりどわ

わくもわりりどわ
野とりきこし

とれんしつらわん秋のよいさよもれなひく尾書を

○今案世奇はふおさるふさくは
戻少れ月のわらふさくして山のしらくたつた
抄八文のん我よむじふくしてて秋しを秋なり

○今梅抄の義あやも終り源家長胡臣奇し
秋の月あはして老の世と山のしらくわくゆきよら
かやうに西の山直すとせむらひまらぬるゆりゆき
是き月のぬらふらふらもあふり山のしらくたつた
よんゆり山望の系也なりあふり

○今梅れい系の戻小ほるてわくし
あふりてあふりあふりあふりあふりあふりあふり
あふりあふりあふりあふりあふりあふりあふり

一 いあまのこりよあまひすいそらとく

○今梅いあまひるるをまらやまれらやむすいそ
らひとてはひとまふこゆり多之俗よいかりせひとり

和名云爾雅注云鴉音立和名曾比日本紀私記用世文字文徳
天皇録用魚虎鳥三字今按魚虎見魚名苑

等小鳥也色青翠而食魚江東呼為水狗古事紀よ

翠鳥とわらり和名とてみとらみとひとらみと

一 ひりくしの紙よかゆりきや

○今梅紫紙金泥のぬりき紙の戸の世やゆて
あつひいさ家のふよまはにかけの紙よとゆ

総角

一 今と甲

○今梅和名云楊氏漢語抄云絡瑛多々理下
他果及瑛ハ切也

同字あり延喜式九月神堂祭注文云金銅多々利

二基金銅麻笥二合金銅賀世比二枚云又同或よ

櫛の字も用れらる和名よ櫛の字たはまかとて流と

よ櫛と流と櫛よ作て流名よまはれ細流よ川給

一今義解小金絲柱とあり糸今の中一縁よ

作きり六帖よ

但馬系のよれもあまのむすひといひのそをいひた

此等絡瑛よ宗とゆり

一 ことばにぞ残しおよめりなると

細よりわいてせうきうをきくことばにぞ残しおよめりなると

○今梅屋集家集云つひよなや海にせはを流ひり
残はわよ六月はかくれ流ひよきうわさ海に流ひり
かたはくははつりー今よしわのしりて東宮な
死ひぬてすりきふ乃らのわわさのふやうきまり
ぬぬれぬの日かうーとひひー人あひよなんすい
よきううの人のあひまをてはささくみとなひー
きうあひまの人いさきうりてたふぬさうりき
いすのさうさうー流ひぬぬあひまのいさうてた
あひまのいさうあひまのいさうあひまのいさうあひまのいさう

一 一よはくははるさうて今を福とまんよをわらせ
かたはつりしひおさせられしきりぬる人あひまのいさう
うにいさうわら

一 一のそはわ

○今葉集よひきさうき之の奇古今れな
拾遺集家集六帖皆一同よわきわくしあわ
用くを新集

一 松乃葉集すれてつひい山ゆ

○今梅日本紀云以水送飯乃丹家集云
うはくつ潮をたきしむねのいけの言あやうわれぬ
うの不始はいさく源かたはよ入ー日よりあはれ

そしねの葉とすくねてま

一 お海川さくたもひついでとららちとね

○今接万葉多弁一

一 上れぬるこの葉は鈍^{コト}にけしれぬ妹よあひこね

一 曉の別やまこしらぬ半あ

細あさぬぬとねのこれと道へゆふ物ははつらる

○今接世奇行もあさふあ

一 今接世とすえぬしとねひとまはさひのこつら

○今接世奇もあふあ

一 弟もりあゆみぬらたすふ

奥入るのさふととすはの海はあふたし屋のつら

○今接世奇行よあさふあ

一 なるしえとわきてとあふ山むたふつまは海をた

○今接世奇前の銅板けくあふととねてあめ

一 ねらふかしの奇よととひあり

いそしねの葉にあもさえてしはありに山をの

一 ころりてあし

わさふいそふたれもあひのすくとさあは

○今接世川奇行よあさふあ

をきて後のふり先世奇ふくつらとあふあ

熱

一 さいこの山は馬きい

海客より海客より

今梅は梅のころかあはれ其のゆゑにわやに子乃
とやとてくねさくらの半なりたむのいひの
紙とてあはれは風は吹れどなをまのゆゑのいひ
あはれい紅葉のあはれをくまのいひか人のいひ
いひこれいひも帰るる半紙中君はありあり
あはれたははらとていひとていひかあはれは
のいひとていひとていひとていひとていひと
よりいひのいひとていひとていひとていひと
いひとていひとていひとていひとていひと
いひとていひとていひとていひとていひと

あはれ

一
いひとていひとていひとていひとていひと
あはれとていひと

細白真の心なり

○今梅は梅のころかあはれ其のゆゑにわやに子乃
とやとてくねさくらの半なりたむのいひの
紙とてあはれは風は吹れどなをまのゆゑのいひ
あはれい紅葉のあはれをくまのいひか人のいひ
いひこれいひも帰るる半紙中君はありあり
あはれたははらとていひとていひとていひと
のいひとていひとていひとていひとていひと
よりいひのいひとていひとていひとていひと
いひとていひとていひとていひとていひと
いひとていひとていひとていひとていひと

一
いひとていひとていひとていひとていひと
あはれとていひと
○今梅は梅のころかあはれ其のゆゑにわやに子乃
とやとてくねさくらの半なりたむのいひの
紙とてあはれは風は吹れどなをまのゆゑのいひ
あはれい紅葉のあはれをくまのいひか人のいひ
いひこれいひも帰るる半紙中君はありあり
あはれたははらとていひとていひとていひと
のいひとていひとていひとていひとていひと
よりいひのいひとていひとていひとていひと
いひとていひとていひとていひとていひと
いひとていひとていひとていひとていひと

一 海かくやういふとあはれ
かへるいふとくかくしはる

○今按前漢書外戚傳云初李夫人病篤上自臨
侯之夫人蒙被謝曰妾久寢病形貌毀壞不可以見
帝願以王及兄弟為說上曰夫人病甚殆將不起見
我屬說王及兄弟豈不快哉夫人曰婦人貌不修飾
不見君父妾不敢以燕嬌見帝師古曰燕嬌
不嚴飾也上曰夫
人第一見我將加賜千金而予兄弟尊官夫人曰尊
官在帝不在一見復言欲必見之夫人遂轉嚮而不
復言轉嚮轉而
嚮裏也於是上不說而起夫人姊妹讓之曰貴
人獨可不一見上屬託兄弟耶何為恨上如此夫

人曰云

一 ちの御しうとひきつけく

ちひはれとれわさいぬあうらちのちぬのみはれ見

○今按世川外何をもつたふまはし後撰一

ち子振神の人うはなれぬはさゆくちるるはる

世平よ似たり

一 きーかごとむいひつちとねとつ末とあて何あひん
細或は今戸て其とひひ一申のかうりそるは
ねいひとれはつ初とねひまうけて何よこのひと
つてしきり

○今按昔世平よりけはる何をたひんかて白

文の行きの先流すそし傍うとよきそよまはしんん
おしるのわすれられたの先い今憑きれつけたのそそ
今憑きまてよじゆまあり

一
の末流しよき地をさしおれたのゆかふじつこま
○今梅井上句の中君のちり下句句ふふ流恨あ
り末しけ流し流洞のそはれおらされはかきよ
ふしり流しとけしそ末の流流人しよき地
ふし流し流ありしよき地ふしよき地ふしよき地
しよき地中君の流ちよき地よき地よき地よき地
しよき地の流しけしよき地よき地よき地よき地
乃休あり

一
はれあふま流うし流あのみと

細いそつし流しよき地よき地よき地よき地

○今梅井上句の中君のちり下句句ふふ流恨あ

りんと流あのみと流あのみと流あのみと

拾遺集巻二

志すりいりし流あのみと流あのみと流あのみと

此款初の岩瀬の社のまへより深切なる谷にたれあへく
いこの敷いあへく中へたれ敷中奇よまき及し
つまやくともたれ敷いこやく死すの河原にけし敷く
さるたり

一 社まき一梅まきいぬあひの光輝こあらあまやとれら

○今梅後撰春下よ 伊勢

垣しよらるるまき死すてふこひの光輝こあらあまやとれら
社まき一ととあまの社まき一とらりたれうたりや
りしとあへく死すてふこひの光輝こあらあまやとれら

一 いふふふふふ

河しよらるるまき死すてふこひの光輝こあらあまやとれら

○今梅中常夏あまをきて川あ今のこし一何ふ
あはれ奇よ後撰撰意二拾遺意又

一 河中常夏あまをきて川あ今のこし一何ふ
あはれ奇よ後撰撰意二拾遺意又

○今梅中常夏あまをきて川あ今のこし一何ふ

こはれまきあまのこひの光輝こあらあまやとれら
此奇蹟奇の危う下にまきひて大君なりあまやとれら
う留しよらるるまき死すてふこひの光輝こあらあまやとれら
川あ今のこし一何ふ
いふふふふふ

○今梅中常夏あまをきて川あ今のこし一何ふ

一 大君の別り時とて今夜の御後此詞とていふ
かりしむらひの御後とていふ月夜とていふ
○今按去統日記

都て出たはて一月おれなすうて流よりい
向き流してなせとていふおていふおていふ
の分派なりとていふ一まよひていふ澄とていふ
いり

一 志那てふやにやのうの海よりくおの海よりぬき
河あつてやにやのうの海よりくおの海よりぬき
○今按世川前万葉よりいふれ一乃葉乃折派と
かきつる人の世をれとていふ一乃葉乃折派と

河せぬ半ねの川より一乃葉乃折派とていふ
かきつる人の世をれとていふ一乃葉乃折派と
ね一乃葉乃折派とていふ一乃葉乃折派と
あて一乃葉乃折派とていふ一乃葉乃折派と
ういそれハ階のかさこいぬく舞を流る人
ふたさうハ片よりふたさうハ片よりふたさう
刻といふへなる階とやあこいぬく舞を流る人
とていふ一乃葉乃折派とていふ一乃葉乃折派と

美本神理能。迦豆岐伊岐豆岐。志那陀由布。仇仇那
美遲袁。須久須久登。和伊麻勢婆夜云
是古事記中卷。應神天皇御製長歌也。又万葉集第

十二云

師名五都久麻尼野方息長之遠智能小管不連

余伊州伊州持米云

こほりまにかとるかつまつてうひむく島波衝の
なれし道はむいし海しこころてやとゆふは
よの波の流んき先より志れむふま布と年と同顔
少く通しれし志れむむいしこころはみらハ藤原路と
て道は路さりしこころは信しあこころは
しよも同しけ浪のつらきり降くよ来りハ浪と
こころの級は似しきとよけ風よふるし浪を
たゆみてつねらよとてしよしし乃し海に死すをえ

てつこころは志れまゆかたはく海に終今り志るま
とこし海に終まてらゆめし海に終まてらゆめし
り海に終まてらゆめし海に終まてらゆめし
神功皇后紀曰忍熊王逃無所入則喚五十狭茅宿祢
而歌之曰

伊装阿藝伊佐智須區祢多摩积波屢于智能阿
曾餓勾夫莞智能伊多氏於破孺破珥倍通利能
介豆岐存奈

則共沉瀨田濟而灰之是より起き伊多氏和名集
云近江國野例郡迹保北在南迹保郷もおの海より
おつる名れ志れしよやう浪とつけれまといわり

み海にけしきあはれうのこ路あり陰よ影に
りやうよ波ありりよほの海とちる

寄生

一 おまへち菊うつらひくこころ旅し
細らひらひくこころはらひくこころのまを
のこころをり

○今梅ての字法也一世巻の中に菊のまをく
とらひらひくこころはらひくこころのまを
くこころをり
あまてうらひらひくこころはらひくこころのまを
月のほろろのまをくこころはらひくこころのまを
うらひらひくこころはらひくこころのまを
かたはらひくこころはらひくこころのまを

一 ころりあつた蘭りさなり

一 わくはしりてくせ

細わさ白ききあれた死のつらねあわぬまうまうらあ

○今接し川を行くあつたあつた

一 わくはしりてくせ

○今接しこもいじつとわと同類かくむす

一 ちあつたこれらや

死者はあつたしりてくせあつたこれらや

○今接し川を行くあつたあつた又金葉のつらね

つらねあつたあつたあつたあつた

一 おはりの月不押さつたあつたあつたあつたあつた

細川奇之良親王の

大空の月不押さつたあつたあつたあつたあつた

つらねあつたあつたあつたあつた

○今接し川を行くあつたあつたあつたあつた

つらねあつた

一 花のつらねあつたあつたあつたあつた

○今接し川を行くあつたあつたあつたあつた

花のつらねあつたあつたあつたあつたあつた

一 花のつらねあつたあつたあつたあつた

○今接し川を行くあつたあつたあつたあつた

花のつらねあつたあつたあつたあつたあつた

取次も新様はなほなほおのちの御事なほしる

○今葉廿一も取次とあり

一 今葉廿二も取次とあり

細書はなほしる御事なほしる

○今葉廿三も取次とあり

一 今葉廿四も取次とあり

○今葉廿五も取次とあり

御事なほしる御事なほしる

一 今葉廿六も取次とあり

○今葉廿七も取次とあり

○今葉廿八も取次とあり

わしより時分はしる御事なほしる

一 今葉廿九も取次とあり

御事なほしる御事なほしる

○今葉三十も取次とあり

一 今葉三十一も取次とあり

○今葉三十二も取次とあり

一 今葉三十三も取次とあり

○今葉三十四も取次とあり

御事なほしる御事なほしる

一 今葉三十五も取次とあり

○今葉三十六も取次とあり

現年の字より、毒玉多編と考むる、和名鈔云
野王按蟪如税及与蒿今 出善齋人謂之食毒即

是たふと、ふまハ初ハ薄くてしらるる、大なるは
なるとそれともなかりありあまほく、半ハ、
あつし、あつし、あつし、あつし、あつし、あつし、
川つとらうてけせう、わわ、わわ、
三稜也、せう、き、らう、り

○今按顯證よて、れく、
む、く、く、く、く、く、く、く、く、
○今按、因縁、大日経疏、一行記、よまふ、似、き、り、
彼、疏、とて、本、け、く、く、く、く、く、く、く、

一 ほとねおあり、志の、薄、き、好、な、り、や、の、高、き、け、り、と、
細、し、の、房、一、粒、数、別、あり、と、り、流、也、但、穂、一、か、
全、粒、を、紙、に、敷、き、あ、の、し、き、ほ、あ、る、と、い、ふ、る、は、
一、粒、に、穂、子、出、る、数、別、也、と、り、流、非、歟、
○今案、お、葉、を、考、へ、

姉、り、し、り、か、が、い、ひ、の、志、は、も、我、が、ほ、な、い、也、
又、六、帖、よ、

な、り、の、枝、が、い、ひ、の、志、は、薄、き、好、な、り、や、の、高、き、け、り、と、
右、万、葉、の、音、と、よ、ま、の、す、れ、と、い、ひ、て、り、れ、と、の、第、三、
と、い、ふ、は、あ、の、と、や、て、あ、の、ま、い、ふ、と、い、ふ、六、帖、の、音、と、
が、所、は、た、り、か、い、ひ、い、ひ、よ、ま、い、せ、り、り、い、ひ、い、れ、り、

きぬとていへばいさかきとていへばいさかき

和泉式部

言せぬとていへばいさかきとていへばいさかき
まのをらうとていへばいさかきとていへばいさかき

○今梅のこゝろありていへばいさかきとていへばいさかき
けいこころあり

○今梅有意コトシラヒ日本紀

四阿

わておくとおとていへばいさかき

○今梅わていへばいさかきとていへばいさかき
わてわていへばいさかきとていへばいさかき
きせていへばいさかきとていへばいさかき
いさかきとていへばいさかきとていへばいさかき

○今梅頭と

細くわさきとていへばいさかきとていへばいさかき
半今とていへばいさかきとていへばいさかき
寺教よわさきとていへばいさかきとていへばいさかき

○今梅とていへばいさかきとていへばいさかき

浮舟

一 ますゆりぬ物といのせし君いあうれうらまはるるん
細いすゝりふとふきほふいしふらり

○今梅ふ代のあえものこたはゆりそふねをいせ
付てあすふまてはゆり代あふあおれいゆり
ぬ枝よ著うらぬそほふんとりてまいたあふふ年
ゆすいりりしちりゆりまらりまゆりあといま
自にともゆきぬらういしすいしあふふいゆを
すひまらりゆを未^{ミダリス}奮しふふふ年のらりゆを
きいせゆれとゆりいけゆを
ふふい友人いしうらえをゆきし

○今梅金葉雜上 河上署之 讀人不知

福ぬる東のふりくくくくくくくくくくくくくくくく
夫本抄第三十六 和泉式部

一 ねぬる東のゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

○今梅後撰

いあせもいれゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
千載雜中 和泉式部

一 世よふゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
かとうくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

○今梅拾遺別 讀人不知

ついでに海女たちをいそぐ神のうら

後拾遺別

中原頼成

いそぐとて海女のいそぐをいそぐ神のうら

一 後拾遺別 神をいそぐといふ別とていそぐ

○今案

案式部

何れは海女神といふとていそぐをいそぐ

拾遺別

いそぐのいそぐ

をいそぐといふとていそぐをいそぐ

後拾遺雜一

深雅通朝臣

いそぐといふとていそぐをいそぐ

いそぐといふとていそぐをいそぐ

抄 我れをいそぐとていそぐをいそぐ
とていそぐをいそぐ

魚梅皇孫をいそぐとていそぐをいそぐ

一 汀乃氷とていそぐをいそぐ

物か

○今案 我れをいそぐとていそぐをいそぐ

續古今集冬

寂蓮法師

いそぐといふとていそぐをいそぐ

一 宮とていそぐをいそぐ

○今案 遊仙窟云 五嫂曰 娘子把酒莫暝

一 けりすれをいそぐとていそぐをいそぐ

○今梅くらびつゝあはれなきはさし先かきし清
あよむへしくらかき先し清かきしわし口は
侍としてほりあはれなきはさし先かきし清

○今梅新正今難一 太清門内大臣

○今梅新正今難一 太清門内大臣
おのの奇とありあらはし

○今梅或は中々の所いふ先と新と記やといふ
うらとわらは清くし奇なりといふ先と新と記やといふ
新のまの乳娘といふ先と新と記やといふ

○今梅或は中々の所いふ先と新と記やといふ
うらとわらは清くし奇なりといふ先と新と記やといふ
新のまの乳娘といふ先と新と記やといふ

用をり

○今梅或は中々の所いふ先と新と記やといふ
うらとわらは清くし奇なりといふ先と新と記やといふ
新のまの乳娘といふ先と新と記やといふ

○今梅或は中々の所いふ先と新と記やといふ
うらとわらは清くし奇なりといふ先と新と記やといふ
新のまの乳娘といふ先と新と記やといふ

○今梅或は中々の所いふ先と新と記やといふ
うらとわらは清くし奇なりといふ先と新と記やといふ
新のまの乳娘といふ先と新と記やといふ

○今梅或は中々の所いふ先と新と記やといふ
うらとわらは清くし奇なりといふ先と新と記やといふ
新のまの乳娘といふ先と新と記やといふ

○今梅或は中々の所いふ先と新と記やといふ
うらとわらは清くし奇なりといふ先と新と記やといふ
新のまの乳娘といふ先と新と記やといふ

恵のあり

一 やえまの山よとばら

行ふ書物やふ山よとばらとばらひらたはなるひらた

○今梅世門前ゆらとせらるやういふ

いふとける

花はしるくしるくしるくしるく

味物なりしとらるる

○今梅いふ寝く福なきといふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

人よとらるるいふいふいふいふいふいふいふいふ

稱しとせぬゆりや

一 里ひる大もの

○今梅

はやひる大ものいふいふいふいふいふいふいふ

わつらとらる

○今梅和名鈔云唐韻云韓章障泥和名阿不利鞍飾

也西京雜記云玫瑰鞍以録地錦為蔽今案即障泥也

後稍以熊羆皮為之

一 六乃とのこめする大なりと

○今梅よとらひる大ものいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

とらるるいふいふいふいふいふいふいふいふ

いぬがあらうと
いぬがあらうと

花あふよみわたりのわよよ乃ひくはくと一とて
わよよとらうらとらうら一とて

一
河のよみわたりのわよよ乃ひくはくと一とて
河のよみわたりのわよよ乃ひくはくと一とて

○今梅白家の沖舟門する指まのなまはらと
用くともいふらうらとらうら一とて

わよよとらうらとらうら一とて
わよよとらうらとらうら一とて

らよよとらうらとらうら一とて
らよよとらうらとらうら一とて

らよよとらうらとらうら一とて
らよよとらうらとらうら一とて

らよよとらうらとらうら一とて
らよよとらうらとらうら一とて

らよよとらうらとらうら一とて
らよよとらうらとらうら一とて

らよよとらうらとらうら一とて
らよよとらうらとらうら一とて

らよよとらうらとらうら一とて
らよよとらうらとらうら一とて

らよよとらうらとらうら一とて
らよよとらうらとらうら一とて

一 宿よかよりのいひりこら路

細き足人のやまはけほおひけし宿はと帰しつるも

○今接し川舟もなきて定家言ふた人の宿こそ
我成に宿されしせり人な後病されしなり人の
宿よかよひわりのいひて志ての山行名をせは彼
山より移されしと昔もよみたるもいひ
あゆむるのいひもいひ三條よきて其のこれと備し
流ふもいひと知れしあまの宿こそかたは
さしていひおしあまらけし
にりいひおしといひし

細衣迫りし人のうらひ白の津出の夜いさとしり

一 このお人をのりおしいひおしるるなり 咲花同

孟卿使のうらひ流舟の流し上舟の舟出の夜に
やまはけしをいひしおしるる

○今接孟卿よりうらひ下は右迫しといひて
うらひわりのわらわはきされし使のりなるも
いひしる

一 舟よかよりのいひりこら路
いひしるるもいひしるる

○今接

一 舟よかよりのいひりこら路
いひしるるもいひしるる

ワリ〜江戸〜町〜

○今梅世記のあはれ久々皆水乃縁より

御文とや記し〜

○今梅白文江州侍渡河あはれ之御文〜
侍渡河あり

わかれも〜人〜おくれぬ〜

○今梅人よれ〜おぬ〜

〜人〜を〜

〜人〜を〜

〜人〜を〜

〜人〜を〜

〜人〜を〜

〜人〜を〜

〜人〜を〜

〜人〜を〜

〜人〜を〜

〜人〜を〜

〜人〜を〜

〜人〜を〜

〜人〜を〜

〜人〜を〜

〜人〜を〜

〜人〜を〜

〜人〜を〜

〜人〜を〜

細いのはなほのまじりたるも
○今梅いりか河がくけりまじり新古今
かきかきまじりおとらりしにのたまふも
いりかきまじりおとらりしにのたまふも
いりかきまじりおとらりしにのたまふも

一 相今らん初花のさほ一花さよ

○今梅細流よは白雲のさほいりかきまじり
いりかきまじりおとらりしにのたまふも
いりかきまじりおとらりしにのたまふも
いりかきまじりおとらりしにのたまふも
いりかきまじりおとらりしにのたまふも

初と初花のさほいりかきまじり
いりかきまじりおとらりしにのたまふも
いりかきまじりおとらりしにのたまふも
いりかきまじりおとらりしにのたまふも
いりかきまじりおとらりしにのたまふも

一 大將のまじりいりかきまじり
いりかきまじりおとらりしにのたまふも
いりかきまじりおとらりしにのたまふも
いりかきまじりおとらりしにのたまふも
いりかきまじりおとらりしにのたまふも

○今梅いりかきまじりおとらりしにのたまふも
いりかきまじりおとらりしにのたまふも
いりかきまじりおとらりしにのたまふも
いりかきまじりおとらりしにのたまふも
いりかきまじりおとらりしにのたまふも
○今梅

口等いものゝたてに下りわらふまは柱をのしけしやせらるゝ
き記も「おしりけふおとすお奇」

一 花とてかきわかれぬ女節もさしての露もなれやいさ

○今梅とよおしとてあそびてのあそび
いけいやうおれいけいけい

○今梅細き魚の口はさのいけいけいけいけいけいけいけい
奇はあそびおきかれのいけいけいけいけいけいけいけい
かといふことなるあそびけいけいけいけいけいけいけい
すのいけいけいけいけいけいけいけいけいけいけい

一 秋のえさをいけいけいけいけいけいけいけいけいけい
○今梅樂天の詩新腸と幸いけいけいけいけいけいけい

先りらふけいけいけいけいけいけいけいけいけいけい
いけいけいけいけいけいけいけいけいけいけいけいけい
き記の字は假名より新絶の字は假名より
なりらふけいけいけいけいけいけいけいけいけいけい

平習

いづれあま

孟威抗河卒

○今梅いあしとくらの眼の字よりあしと威抗と
殊に情推とんえたり威の字音ハあしてはあぬ
上小音と刻と紙合て威抗ととくらあしと

たづくいづれあま

孟退こま

○今梅いあしの中は此詞あしと威の字音ハあしてはあぬ
たづくいづれあまとくらあしと
たづくいづれあまとくらあしと

けやくとせうあま

○今梅芥子焼りとい護摩より魔怨等紙降伏
すふとい白芥子あし用る中へ
けやくとせうあまとい今詞より又あしと
あしといの字よりみくとい今詞より

ついでとくらあま

○今梅著深領とくらあまのま

わつ佛系よいて結とくらあまといあしと
○今梅竹紙あしとくらあまといあしと
あしとくらあまといあしと
あしとくらあまといあしと

仲文家集

わづらひぬる世はふらふらのおもてたらしと我のこゝせん
わづらひぬる世はふらふらのおもてたらしと我のこゝせん
— せいの意あり

— つまきまろ人物しつたけしや

細海舟のよもはたはまのり

孟より舟のよもはたはまのり

— ○今梅あはれの中より舟しつたけしや
まのいしぬらふらふらのおもてたらしと我のこゝせん
こゝせん— せいの意あり
— 舟のよもはたはまのり

— ○今梅あはれの中より舟しつたけしや
まのいしぬらふらふらのおもてたらしと我のこゝせん
こゝせん— せいの意あり

— 世の中にもはたはまのり

— ○今梅六帖

— いてはたはまのり

— 波夕音の

— ○今梅あはれの中より舟しつたけしや
まのいしぬらふらふらのおもてたらしと我のこゝせん
こゝせん— せいの意あり

— 舟のよもはたはまのり

— ○今梅貫之家集

一 いとせいんことよなりて

○今按新紫芳九は其師歌二首云、同第四卷は
其禮越しつゝものめは其師歎若聖と同一の死
一 といふ橋あやうらりり

○今案淮南子云若行獨梁不為無人不疏其客
六帖并二橋哥よ

一 津のまのなほの浦のひらきかたはあはれ
一人くもとのかたのこゝはさうし

○今按一人くもとの詞
字あゝの序
をばよや

一 雨のさふや

孟惡サカ

今按神代紀よ神性とかぶてかたごとあり
物さばさうとち人のよまゝいひさりせれつきと
とつた同いこま小準して知庵一悪ハ日本紀
みはらうとこと先と別家より不祥サカ日本紀不良同同上
又休祥ヨキサカナリ同上くまはけいさういさういさういさうい
いさういさういさういさういさういさういさうい

夢浮橋

一 きつはらひはるや

○今梅兼感哥よ

みらねのわらわのくらはふ京よねりときくははるや
はらより後作名のおよまはるはるやとよ先歌哥
おはる哥あはるはるや

一 おはるよんこりり

孟生王家無等倫 日本紀王のこの後也

○今梅よんこりりの河末摘花の巻よりおはるよ
よのんこりりわらわ王家の音便こりりは流通を
つく河をこりり王家流といふなり

一 小野のいよとあはるよ

今梅青葉つる山はも葉の山といふは紅葉すは
山はも葉つる山といふは知の花ははる山は知も山を
と紅葉つるも葉の第七旋は哥

恒らよまはるよ
けき山は馬やとあはる

い青山の葉はけきこりりはるよの山といふは
河をよとあはる古事記中云本年智和氣御子
到於出雲拜訖太神還上之時肥河之中作黑標橋仕
奉假宮而坐尔出雲國造之祖名岐比佐都美飭青葉
山而立其河下將獻大御食之時且御子詔言是於河

右源註拾遺七卷一覽湖月抄之
序率爾註愚意以備他日校考者
也後加大意一卷
共八卷全

元祿九年七月十九日

密乘桑門契冲

同十一年正月五日一校畢

此物語抄物の大筋ありハ河海を行くは知る
ト略記の遺へ家歎草案宛傳字の得るは
日年紀の茶葉等にもやして川をさぐる事
の申書より記すべし此後より記人より
はきて此を流る抄より先代年よりして
了き人の言はゆふ事なきはいつきとに
之の源を考へて川を流る事一書
りてあつと候名物語の出来として家抄も
言得とうけとていふ事よりわづらひ

年みられたるは末おとほしとこし事なり
とありてほししは後より也

苟且名之

源註拾遺 大意

一 三段の褒貶ハ資治通鑿の文概司馬光の
詞とするふ云々今按此説ハ浩之通鑑ハ趙宋
英宗治平三年ハ出後冷泉院治曆二年ハ
わかれハ物類ハをくく事六十餘年ハた
也

一 拾芥抄上末源氏物語目錄部等三十二云

十明石浦傳

廿二東屋 使席

右これよりハ明石の巻乃次ハ浦傳の事也

上古今記のしる物終とはある又級記社
うら過し又余の物語もらまふる
そら

一 校衣云

わらう海り世にのうくしちうれとせの
浪をうひてしれかひくくさかめわと
浪ふふふふふふふふふふふふふ
はわのまゝとほとほらよ海をなま
よりれと御もてちうかれしすわて
かくまふ半あもわら福しうとま
くま

しつちあ海りしる物終とはある
浦とちわられしは流しきんをま
しくお海られ

又云 源氏云 源氏ニ字今くふ しかがらこのし

きいしはらふそのはの海り皆はし
海りよむふとまを流しふ海りや
を流しぬ女云也

又云わらうしつちあ海りしる物
これや昔れわらうしつちあ海り
光源氏のしつちあ海りしる物

す後と浮現するこゝみひくかきあつたふ
つたもたつた

右後衣は源氏と云はるゝ為時作さひる死
母の他より物をれも後衣とてと作物
たふはるゝありして川引の願解業抄
よはるゝ後衣の他考大式之位よあは

一 平判官康頼入道法名性照かきる宝栴集
并四の妄語戒を説て云海らうく業式あり
虚言説以て源氏物語と違ひしる罪よと
多地獄よ隨て苦患思ひしる記成よとやく

源氏物語と破と控て一日経をかきてとゆ
少敷——人の羨にんんらうかとして
もあ合て一日経を書て供養——けるを
之えあやん物といつりしれし家々の集
たしはき定て千事説り先外歌前おほく
侍らあかゆら

新勅撰集釋教云云式部しあやて縁縁
経供養しゆらあし菓草喻只と馬ら
せあ

権大納言宗家
はのあは我りやねんじり

こらむくうたのまらゆりよ

墮獄の沙汰わらふ源氏とりてわらふ人
切徳とすして治政こひりりや一篇の表白に
と一冊時作てなばや

一袋草書に故あはれのふれ入撰集いかに
やうや後拾遺集一巻為時奇

これ程らりなむと思ひし事

おのふくまら月とともふすれ

是ハ源氏物語のふれかのおしりよいしやぬ
こらむくうたのまらゆりよ

断作也と云は事川なら今の年一と
歌の沙汰くむらりからりのゆとつと
なしおはつたまきゆ也 今後此為時ふ古本
の源氏よはらるる今この源氏よはわらひ
ふよ雲隠の巻奇して源氏物語院へ入
てよん流ふよすして或なりむと入ぬか
して又奇流用らるよや為時源と古本
のふと一とれらるい是も一説ハ為時と
らむくうたのまらゆりよの奇と集よ入
物語と常の事也拾遺集

三
むしきや我より人きと亦なり
ふれしつめあつとらんじしん
四五
思ふとあとしを并のめししん
ふけしとあつらんつりあらん

此二首はともに入つた物語の奇也

一 紫式物語とらるる紫式部の娘大式三位
のこあし今一人楚王の愛乃是は入宮の
ゆゑの紫式部のむとあ我後の希云越前
の局歎晴死こ世あり

一 明星云い次のを源長の九はのり

書るる西宮在大臣高明云々此後信一がし
と放いけ物語と寛弘の初は他といへり
冷泉院安和二年より寛弘元年まで二十
六年也存式の初少よりなせよりておひ
歎をり比の色いとあきけみ十葉おと乃極
紫式部日記の寛弘六年記の色ハ又十葉斗
たし死の後宣孝の嫁して久式の信致生
産死のお遠めや

一 文級日記少と源長ハ六十竹帖といふこと
六十帖といふ今流布と云々雲隠浦の棧

席ホニ之帖と爲す致死して又教と奉ニ
六千帖といふ死なれと天台六千卷と准へるを
いふといふのあつたり此中よ天台教門よ分てかざる
取らざるよりて台宗よ明くしる人のとていふ
業苑物語ゆと佛法の源とことなる事あり
廿二と昔法門の哥をいふとこれ大
意致のあつたり人あはらざる事あり人ゆ檀那院
贈信西よ一心之觀の血脈と相續しる事あり
ゆといふ武部天台法門の意とあるも信非乃
卷よ法非のあつたりむらりたる武部ゆい

日記よいふことく板津川にけ経よみかせる
如し似あしぬことけ色なき世もく日記
りきよしこといふことけのさかぬはあはれる
あり

- 一 武部名を宗上の日記に記すことありて詮せしむる事あり
- 一 日記の公任の日記に文部物語と宗の物語とありて
武部とこれら一時人の惟規に父あり時と
史記をよみしむる事ありて武部といふことありて
きりあはれしものことありてやとみ時と
いふことありて後世の事ありと事ありとありぬる事あり

なりし一の字はふまゝあゝのかく傳へしや
よありいゝ字はしづか日記とてしり
一 山物語祭記に有為時作出来たり地れ
人分めあゝこれのみれ一定して信し
一 定家解の親し哥いしれくもむのころて
いふ行乃おひはしりしやしり
右今祭部とてしりこれおたためていふ
ふまのおひしりし物せは物語とてしり
人意強しにふしりしやしり
世物語とてしり人をしりてあゝせんいふ

すしけきとて身女あゝ一節始終好色し
付てかゝるは換下り新人もあゝ又聖主
賢臣あゝに准へてかゝる市しりしりて飛と
地れしや地獄も入るん源氏の所言あ事
わしりい父子あ付ていゝ行の道そ君臣あ付
あいしり又何の乃そ白告りしり
はら流るい朋友あ付て行送るり
あはすあゝしりし夕音い流るあゝ
たらあ物本の雲とてしりしり
乃白告部とてしりての後皮たりしり

罪よりぬくは春秋の褒貶の善人乃善の爲
人の悪行と面とよき影してこそいふこれき
わごとく留これいと勸善懲惡のまじりたるれ
い物語と一人のよき名ありとて又あおまうこれ
半とよき影してこれとよき名ありとて
一 本抄は天台の化後化法のお経と四教を
乃沙法なりをうくかた物語とていふも
ゆのと寸寂蓮おとくも徳のあつてもゆとの
こといひつむはたしくあつていふこと
物語の中こその人なりぬ法解といふ

れとくこといひつむはたしくあつていふこと
ゆのと寸寂蓮おとくも徳のあつてもゆとの
こといひつむはたしくあつていふこと

一 勅撰の集れ中い物語の不出るるに千載集
悪四寄源長物語悪といふなりとよむなり

よき名ありとて
いふこといひつむはたしくあつていふこと
ゆのと寸寂蓮おとくも徳のあつてもゆとの
こといひつむはたしくあつていふこと

新勅撰新編よりのよき出づるべき
同難二源氏の物語とてきくも奥の物語
れてゆきし時 後一任藤原子

こゝもあれはわらふに
こととなくいわれしもの

續古今雜中源氏物語のよきもの
あまよりくはる人よはるしもの

月花門院

後ふるわらはるはと神おきて
むしよかへるしもの

今更に源氏めいしはるしもの
醍醐金前を改て長女

かくよはるしもの
後拾遺物も源氏の巻のり

中よりしは 権中納言公雄

神垣を記の
古跡の文は

わらふ巻の名乃中し篝火

讀人不知

わらふもしはるの巻のり

四と申すは言へりてはなりぬるなり

新撰古今集哀傷源歌詠身傳りて後
乃を忘し後坊よりして活長物なるの
巻く紙題よそ人へふ所よりと記すなり
時相左衛門の是乃らと前集後集法

かきりやまぬ出ー詠りててと
なるはあまのあそとての形一と

おれ時模第紙 宋書法師

留の事紙たう記せ
じうくちりぬ

一 わるもの、一もあいうわをりふ日記より後
物治より長弁の又十餘帖の中よりありて
そのき半より紙を記きりらりぬの
あも詩文と長紙あてけきい世の筆とそ
と長弁のいけりてりやとてり

毛詩の八関睽多強新等の公卿を正妃の注
化とらりて鄭衛の詩の淫放をいすむる悪
水火のこゝ但文章よあてては鄭衛の詩
もあつるなりけり物治の人とらりて美悪
雜亂せりりらりての文ありて准らて記す

藤原雅朝朝臣

はらへおくわやほをゆふ夕ふは乃
御これわりの志を巻ともうせし

丹波忠守朝臣

心あてふせれをいはらけさきて
わさささまね夕ふほりやせ

かくまわきと揚右同合源治秘決おとこれ
しえさつわの勢い山物終の中乃お末の
集し入るハ新拾遺集雑中し
野々々々
紫式部

里のふん我身ありまの山塚乃

うらのうらそいしほさき

浮船の巻乃奇なり

一 法抄といはれしもの大意は分中し用あさり
わりの不用なることあり法書と准ら(史記九傳
おしにます)キヨウキキキキキキキキキキキ
うらゆあささと假名よかりあよ似合す
まてふゆきものうらつる中しを重く用
わら半紙のそり巻く此は浮舟源氏并
追の治る月おり用あさり

先てきりかきせぬしてそ殿いよせ給ふ御せ
ようし御せぬかきしるるいんはあつたの
内約いなきはるる一ちもうらふよと一とほ
らふものこもをぬきせの中らりりいんはく
うんぬのよりのを案

源氏の物より源氏よりあるはこの源氏一
てきりのもりいもしてきりつたわては梅の
しこふあきつるかみまうとある梅の下といはれ
まじりのしちしをてれいんち人の
あしてこらぬあし一とらぬあふ

今海をせしむは

人よまことこれぬあはれをんこの

とれものこからあし一とらぬあふ

こまににれしゆし一九式アかからあし

一之ヶ大車よりより源流秘決より格なり一を
他より御よりいこえしりいふとてひもくろ丸傳
すていあるゆしは之夜式も物語のこ李部
王記よりてゆし一純す人しは川ははきに
りふらし一又同物格末しと世事あはれよ
抄よりりり李部より記の式よりしりり又

楊名介の清慎公の楊名國白の詞楊名回言
と信正入道とと詞あり事きれてはく
為しこのわいのうり又之得座は事なり

源氏物語抄之部題号并作者

河海

四辻元大臣善成公

花鳥餘情

一條禪閣兼良公

細流

西三條道遥院実隆公

孟津抄

九條禪閣植通公

咲花

久我庶流夢庵肖柏咲花老人

泯江入楚

中院也足軒通村公

明星抄
万水一露
湖月抄

右の法抄に漏脱ありりとか(差異)
と云ふ契沖今按て以證據とて
著述せし書也



